

# 重要文化財 林原美術館所蔵 《綾杉地獅子牡丹蒔絵婚礼調度》の研究 — 図様分析を中心に —

大阪市立美術館  
菊地泰子

岡山・林原美術館所蔵の重要文化財《綾杉地獅子牡丹蒔絵婚礼調度》（以下、本調度）は、慶安二年（1649）一条教輔（1633-1707）に嫁した輝姫（備前池田家初代光政女）の婚礼調度として、幸阿弥家十代長重（1599-1651）一門によって製作された調度の一部である。現在の所蔵先は五箇所確認されている。いずれも同文様、同技法の調度でありながら、これまで異なる所用者の伝承をもつ婚礼調度として、おもに『幸阿弥家伝書』の文献に基づく時代考証を中心とした所用者の検討に研究上の関心が集まっていた。

本調度の図様分析、技法分析に関しては、調度に描かれた獅子と牡丹とを吉祥意匠と解釈するにとどまり、染織文様を基調とする綾杉については、ほとんど等閑視される傾向にある。長重が寛永十年（1633）に製作した《菊の白露蒔絵調度》、寛永十六年（1639）に製作した《初音の調度》と比較してみても、王朝和歌や古典文学に基づく文学性、絵画性、葦手文字を扱わない調度と指摘されたことを除いて、本格的な議論はほとんどなされていない。本発表ではこうした研究状況に鑑み、本調度の図様分析を中心とした読解を試みる。

本調度の図様を解釈する手がかりの一つは、綾杉の地紋様上に咲き誇る牡丹と、その脇に戯れる数頭の獅子の姿である。発表者は、獅子同士の間隔、体躯の比較によって、この獅子に雌雄（夫婦）、子どもの三者が描かれている点を明らかにする。次に、牡丹は金銀高蒔絵によって描き分けられている点に注目し、紅白二種類の牡丹をあらわしていることを指摘する。これは、寛永年間に再興されたとする祝言能「石橋」の乱序の場面において、紅白牡丹に戯れる親子の獅子が相舞する姿に対応すると解釈されうる。さらに、金銀切金で克明に表現された牡丹の葵に対して、「牡丹芳、牡丹芳、黄金葵綻紅玉房」（『白氏文集』）を引用する「石橋」の詞章「牡丹芳、牡丹芳、黄金の葵」に基づく造形意図を読み取ることは、十分に可能であろう。

そして、獅子より大きく描かれた牡丹が本調度の主役であると読み解き、同じく「牡丹芳」の一節「照地初開錦繡段」に見える、最上級の絹織物である「錦繡段」が牡丹の姿を称えるように、調度の背景を埋め尽くす綾杉地紋は、上文様の牡丹の美しさを形容する図様と類推する。

幸阿弥長重が活動した17世紀、江戸幕府が能を式楽に定めたことによって、江戸城本丸と西丸には幕府公式行事に使用される表舞台が設けられ、祝言、先祖供養、参詣諸行事、公家などを接待する宴席の場として能楽が催されていた。このことは『徳川實紀』、『古之御能組』に詳しい。本調度にあらわされた図様は、幕府揺籃期を経て王朝文化受容の傾向から離れ、安定期を迎える家光の時代における、武家好みの主題の表象と考えられる。そしてこの調度を、《初音の調度》とは主題を大きく変えながらも、引き続いて文学性を宿し、音楽性をも有する調度として位置づけたい。